

仏国寺の蓮池に関する一考察

洪 光杓
東国大学校造景学科

A Study on the lotus pond (reflecting pool) of Pulguksa temple
Hong, Kwang-Pyo
Dept. of Landscape Architecture, Dongguk Univ.

I. 序論

仏国寺は新羅景德王10年(751)に大相であった金大城(700-774)が創建した¹⁾新羅時代の代表的な寺刹である。仏国寺が創建された時代は新羅が三国統一を成し遂げ(668)てから約80年余りが経過した頃であり、新羅はまさにこの時期に至り最高の繁栄期を迎えていた。とくに文化史的側面から見たとき、新羅は統一以降初めて外国から受け容れた外来文化を我が国の風土に合うよう再解釈を試みるようになるが、このような事実は寺刹の造営を通じても明らかである。つまり三国統一以前に造営された新羅寺刹(興輪寺、皇龍寺、芬皇寺など)が中国の寺刹形式の模倣からなる塔中心型寺刹であったとするなら、統一以後に造営された寺刹(四天王寺、望徳寺、感恩寺、甘山寺、仏国寺など)は塔・金堂並立型という新羅独自の新たな形式を呈するようになる。とくに仏国寺は、四天王寺(679)を基点として出現する新たな形式(塔・金堂並立型)の完成型と評しても過言ではない形式的特徴を示しており、注目される²⁾。

仏国寺については、様々な側面に表れている特徴的な現象から、その造営上の意味を探ることが できる。それらは、寺刹が王京の外郭部の山麓に位置しておりそれ

以前の寺刹とは異なる点、聖と俗の空間区分を石壇という新たな形式によって表現している点、さらに青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋を導入し石壇で形成された異質的性格の空間を互いにつなげている点などとして挙げられるが³⁾、このような現象は、それ以前の寺刹には見られない形式上の特徴と言えよう。とくに仏国寺には、蓮池という新たな概念が導入されており、関心の対象となっている。勿論「浄土三部経」中の1つである「観無量寿経」には功德蓮池という宝の池に関する記述があり、インドや中国の寺刹では水景観要素が寺刹に導入されていたことがこれらの記録からわかる。我が国においても通度寺(646)に九龍池を造成したとされる創建説話が伝わっているが⁴⁾、仏国寺のように入口部分に本格的に池が造成された例は見られなかった。このような事実から、仏国寺は創建の過程で新たな概念の水景観構成原理を導入したことがわかる。したがって仏国寺についての研究⁵⁾は、造景学的側面からなされるべき課題であり、その結果は、寺刹造景研究は言うに及ばず伝統造景研究の礎として作用し得るものと思われる。

現在我々が目にする仏国寺は、1970年代に復元されたものである。しかし様々な側面から観察すると、復元工事によって仏国寺がその原型を一体どの程度回復したの

¹⁾ 「三国遺事」卷五、孝善九、大城孝二世父母条
一方「仏国寺古今創記」は、仏国寺の創建年代を法興王15年(528)と記しており、三国遺事の記録とは異なっている。創建年代については仏教学や史学分野でかねてから議論されており、これらの内容については次の両論文が参考となる。

黄寿永、1976、仏国寺の創建とその沿革、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局

金相鉉、1986、石仏寺および仏国寺の研究、仏教研究2、韓国仏教研究院

²⁾ こう述べる根拠は、仏国寺が塔・金堂並立型寺刹の中で最も遅れて出現する例であり、空間構成的な側面からみる

場合、比較的安定した形式を示していることによる。

洪光杓、1991、新羅寺刹の空間形式変化についての研究、成均館大学校大学院博士学位論文、P113-136

³⁾ 仏国寺に築造された石壇は、下位の娑婆世界と上位の仏国浄土とを区分する手段となり、その石壇に据えられた青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋はそれら異質の両世界を互いにつなげる機能を持つ。

⁴⁾ 通度寺聖宝博物館、1987、韓国の明利通度寺、三省出版社、P18

⁵⁾ 仏国寺は他の寺刹に比べ残された文献資料が多く、たとえその原形の復元に問題ありとする議論が提起されてはいるものの、伝統寺刹の中では比較的原形保存の状態が良好

か、という点で疑問を抱かざるを得ない⁶⁾。とくに蓮池は、発掘過程で瑣末な理由によって再び埋没してしまい、我々にその姿を見せる機会を失ってしまった。今からでも仏国寺については、その原形回復に向け、各分野で新たなアプローチが必要と思われる。

本考察は、仏国寺の原形回復に向けた取組みの一環として、とくに蓮池を復元するためのいくつかの手がかりを提供することを目的に、仏国寺の景観および蓮池に関する文献資料の考察と実地踏査に基づき行われたものである。

Ⅱ. 仏国寺の景観に関する文献資料

仏国寺に関する文献資料は他の寺刹に比べ比較的豊富である⁷⁾。これは仏国寺の持つ価値とその重要性を端的に立証する明らかな証拠と言える。

仏国寺に関して伝わる文献資料の中で重要なものとしては、「三国遺事」、「仏国寺事跡」、「仏国寺古今創記」、「円宗文類」、「東文選」、「東国李相国集」、「民斎文集」、「鑑洲集」、「活山集」、「梅月堂詩集」などが挙げられる。しかしこれらの文献資料から伝わる仏国寺に関する内容は、その大部分が仏国寺の創建縁起と変化の過程、そしてそれに伴う時代背景および作用因子と仏国寺の仏教史的位位置および比重または関連人物などに関するものであり、仏国寺の景観を解釈できる内容は極めて少ない。このため仏国寺の景観的側面についての研究は当然制約を受けざるを得ないが、このような問題点は統一新羅時代の寺刹景観を研究する上で大変残念なことである。

仏国寺の景観について最も関心が寄せられているのは、仏国寺がその創建時に一体どのような物理的形式を備えていたかという点である。より具体的に言えば、仏国寺創建当時の寺域の規模がどの程度あり、どのような建築物がどの程度の規模で建てられたのか、寺刹の空間構造

および配置形式はどうであったか、さらには仏国寺の景観を構成する要素としてどんなものがあるのかという点などである。しかしこのような全ての事実を明らかにする創建時の記録は、不幸にも見つからない。ただ、活庵東隱が1740年(英祖16)に著述した「仏国寺古今創記」がこれらの疑問を解き明かす内容をいくつか含んでおり注目されている。「仏国寺古今創記」は仏国寺の創建以降、再創と再修の歴史を年代記式に記述した書物である。この書物の中でとくに我々の関心を引く内容は、8世紀中頃に金大成が仏国寺を再創⁸⁾した当時の建物の名称とその規模に関する詳細な記録であるが⁹⁾、この記録の中には九品蓮池が含まれており水景観要素についてもある程度その重要性を認識していることがわかる。しかしこの文献資料に記録のある建物が全て再創当時のものであるかは疑問の余地がある。なぜなら、この書物は前代に著された10余種類の典籍や資料を引用して書かれたものであり、伏藏記、上樑文などを除いては信頼度を高める資料がなく、甚だしくは内容に錯誤と混乱が少なからずあり、古い記録を書き改めた箇所もいくつか発見されたことによる¹⁰⁾。

一方、朴棕(1735-1793)が1767年(英祖43)に慶州を旅しながら書き記した東京遊録の中にも、仏国寺に造営されていた建物の名称やその位置、そして特徴などについての記述があり、当時仏国寺が誇った寺刹景観を解釈する上でたいへん役立つものとなっている¹¹⁾。

以上の文献資料の他にも、郷伝に「仏国寺の雲梯と石塔は、その木や石に刻まれた技工が東部の幾多の寺の中で最も素晴らしい」との記述がある。この郷伝で記述された内容を見ると、仏国寺の造形美と景観の質的水準がどれほどのものであったか推察できる。また、梅月堂金時習(1434-1493)が詠んだ詩「仏国寺」や柳馨遠(1622-1673)の「仏国寺」と題する詩、そして草衣(1786-1866)が1817

であるため、伝統寺刹の景観的側面について研究する上で極めて重要な対象となっている。とくに、仏国寺が統一新羅時代の代表的寺刹である点は、仏国寺の研究価値をより一層高める要因となっている。

⁶⁾ この問題については、東国大学校新羅文化研究所が1990年11月に主催した第9回新羅文化学術会議—仏国寺の総合的再考察で部分的に取り上げられた。

⁷⁾ 仏国寺に関する文献資料およびそれらの詳細な内容については、金相鉉、1994、仏国寺に関する文献資料の検討、芝邨金甲周教授華甲記念史学論叢、P235-254を参照されたい。

⁸⁾ この部分については、注1)を参照されたい。

⁹⁾ この内容については、仏国寺復元工事報告書、P272-274参照のこと。

¹⁰⁾ 韓国仏教研究院、1988、韓国の寺刹1、仏国寺、一志社、P15-27

姜裕文、1937、仏国寺古今創記跋、仏国寺古今創記、慶北仏教協会

金相鉉他2名、1992、仏国寺、テウオン社、P15-17

金相鉉、1994、前掲論文、P243-245

¹¹⁾ 朴棕、「東京遊録」、「鑑洲集」、巻15

年に書いた「仏国寺懷古」には、とくに蓮池やそれに関連する水景観の詳細な内容が記されており、仏国寺の景観的な側面を解釈する上で大きな手がかりとなっている。

Ⅲ. 蓮池の位置

梅月堂金時習(1434－1493)が詠んだ「仏国寺」という詩に、次のような一節がある。

断石為梯压小池

石を切り取り築いた階段小さな池をおさえるかの如く

高低楼閣映漣漪

高く低い楼閣がゆらめき映る¹²⁾

この詩から、仏国寺には小さな池があり、それが切り取った石で築かれた階段の下部に位置していたことがわかる。この詩の内容からは、切り取った石で作った階段が青雲橋と白雲橋を指すのか、あるいは別の階段を意味するのかは定かでない。しかし仏国寺の創建縁起および創建時の建築などについてその内容を詳細に記録した「仏国寺古今創記」には、仏国寺の初創時にあった階段は青雲・白雲橋と蓮花・七宝橋以外はなく、それ以降再創・再修の記録にも階段についての記述がない。したがって梅月堂の詩で詠まれた階段は明らかに青雲・白雲橋または蓮花・七宝橋のうちの1つであり、高く低い各楼閣がゆらめいて目に映るという一節からは、その位置が石壇の下方部分であったことは動かしがたい事実と思われる。勿論ここにある、高く低い楼閣がいかなるものかは言及がなく定かでないが、空間構造的に見て石壇上にある梵影楼と回廊を指すものと考えて間違いないと思われる。

一方、草衣(1786－1866)が1817年に著した「仏国寺懷古」¹³⁾にも、蓮池に関する次のような内容が見られる。

昇天橋外九蓮池 昇天橋外の九蓮池に

七宝楼台水底移 七宝楼台がゆらめき

無影塔看還有影 無影塔の影を眺めると

阿斯来鑑到今疑 阿斯女が来て眺めるかの如く

この詩から読み取れる別の事実は、蓮池が昇天橋を渡っ

た所に位置しているという点だが、この昇天橋がどこに架かっていたのか未だ明らかではない。しかし言い伝えによれば、昇天橋は現在の四天王門を過ぎ石壇の前の前面空間にさしかかる場所に流れる小川に架けられた橋だと推測できる。そうであれば、蓮池は進入過程から見やすい地点に位置していたことになる。また、無影塔(釈迦塔)が投影されるという事実も目を引く内容であるが、この一節から見る場合、蓮池は釈迦塔の影が投影される範囲内のある地点に位置していたことがわかる。

一方、釈迦塔の影が映るということは、過去仏国寺に設けられた回廊が今の回廊とは異なった構造を持っていたと推測できる。なぜなら、現在の回廊のように高く閉鎖的な構造を持つ蓮池があったなら、その水面に影が映ることは有り得なかったからだ。

また、七宝楼台が映るということは、前述の梅月堂の詩に見られる内容と同一のものと考えられる。ここでも七宝楼台が何を指すのか定かでないが、これを石壇につながる楼閣と見なす場合、梵影楼を意味していると解釈しても間違いではないと思われる。

蓮池に関して知り得る別の記録として、李徳弘(1541－1596)が宣祖13年(1580)に慶州を旅しながら書き記した「東京遊録」¹⁴⁾という紀行文が挙げられる。彼は仏国寺に立ち寄り蓮池を眺めては次のように感想を綴った。

日の落ちる頃仏国寺に着くと、霧が深くたちこめ無人のようであった。ようやく1つの石橋を渡ると、大きな岩の上に蓮池があり、その池の北側に木の樋の飛泉が数里を伝って石槽に注がれている。木の樋を過ぎて雲橋に立つと、石を磨いた橋はあたかも虹のようであった。

この文からは、李徳弘が渡った石橋が、前述の草衣が記した昇天橋であるかどうか定かではない。しかし状況を考え合わせると、この文にある石橋こそ昇天橋であると捉えても突飛な解釈ではなかろう。そうであれば、蓮池は昇天橋を渡った場所に位置していたことが再確認できたと言える。しかしここで、大きな岩の上に蓮池があったとする点をどう受けとめるべきか、疑問が残る。なぜなら今我々の考える規模の蓮池であれば、それが岩の上

¹²⁾ 「梅月堂詩集」、巻12、仏国寺

¹³⁾ 「韓国仏教全書」10、P835

¹⁴⁾ 「民斎文集」巻7、東京遊録

に造られたとは考えづらいからだ。しかし、1970年に行われた発掘調査の結果、蓮池の周りを囲むように石が築かれていたことが判明し、この形を見て李徳弘が大きな岩の上に蓮池があると考えたのかも知れない。この場合石槽は蓮池の北側に位置することとなり、飛泉を経てその石槽へと水が落ちたはずである。さらに見方を変えると、もしや石槽と蓮池は同一のものではないかとも考えられる。なぜなら朝鮮時代の文献の中に、石槽を石蓮池と表現する例が見られるためである。勿論このような考えはあくまで推定であり、今のところ明確な解釈を示すことは難しい。いずれにせよ、この文を通じて我々は仏国寺に木造飛泉があり、石槽が導入されていたことを知り得たが、このような施設が創建時からあったかどうか明らかではない。しかし1969年から行われた発掘調査の過程で、石壇前面空間の東側にあった長方形の石槽についての調査が行われた。その結果それが新羅時代の石槽であることが確認され、その時代の石槽の中では最も傑作であることが判明した¹⁵⁾。このため李徳弘が「東京遊録」で言及した石槽が、これを指しているのではとの推察も可能となっている。

結局のところ李徳弘の東京遊録では蓮池の概念が不明確であり、その位置について議論することは難しい。しかし仏国寺に高いレベルでの水景観構成技法が用いられていたことが、ある程度明らかとなった。

これら文献の解釈を通じて、我々は仏国寺の蓮池がどの辺りに位置していたのかを類推・解釈することができた。

ところが、仏国寺復元工事のための発掘調査の過程で、蓮池についての発掘調査が1970年10月から約40日間行われ、蓮池の位置を確実に把握することができた。

発掘調査の結果、最初の予測とは異なり¹⁶⁾、青雲橋の南側から東西長軸39.5m、南北長軸約25.5m、深さ2～3mの楕円形の人工蓮池が発見された。この蓮池の石積み方法は統一新羅時代に典型的なもので、ここから統一新羅時代の瓦当など数多くの遺物が出土した。これによりこの蓮池が創建当初から存在したことが判明した。

結果的に仏国寺の蓮池は、前述の文献に見た通り青雲橋南側の梵影樓の辺りに位置していたことが明確となっ

た。しかし残念なことは、蓮池に関連する遺構の全貌を明らかにできぬまま、押し寄せる観光客、予算不足、発掘面積の拡張、樹木の障害、農繁期による人手の減少、12月初旬の気温の急降下などを理由に、姿を現しつつあった蓮池を再び埋没させたことだ。このような事実は、造営過程から仏国寺全体の景観をもって表現すべく意図された内在的な意味に対する無理解からくるもので、今後長い間非難を免れないであろう。

Ⅳ. 蓮池の機能と意味

仏国寺の蓮池についてのいくつかの記録を基に考察すると、仏国寺内にあった蓮池は主に影池としての機能を果たしていたと思われる。このような事実は柳馨遠(1622－1673)の「仏国寺」と題する詩に見られる「寺影池中見」という一節を通じて、より明確に確認することができる。

仏国寺の蓮池が実際に影池としての機能を持っていた事実は、1970年に行われた蓮池についての発掘調査中にそこに溜まった水の上に投影された釈迦塔の影が偶然写真で撮影され、我々が目にする事となり一層確信を持つに至った(写真参照)。これを通して、前述の梅月堂や草衣の詠んだ詩句の内容が実際にそうであったことを推察できるようになった。しかし当時は大雄殿一郭の回廊が復元される前であったため、釈迦塔の影が蓮池に溜まった水に投影された点に注目する必要があるだろう。つまり、現在のような回廊構造であるなら、蓮池が影池としての機能を果たせなくなることは明らかな事実となる。結局のところ以上の内容を踏まえて見ても、現在の復元された回廊をその原形と見なすことは難しく、1日も早くこの点の修正がなされるべきであろう。

元来、仏影崇拜はインドから中国を経て我が国に伝来したのと考えられるが、これは一般人に神異的な内容

¹⁶⁾ 発掘調査団は、過去より伝わる九品蓮池と蓮花・七宝橋との関連説に従い蓮池を発掘するため一次的に蓮花・七宝橋の下に探索トレンチを入れたと発掘調査報告書に記録している。しかし予想とは異なり蓮花・七宝橋の下からは蓮池址と推定し得る根拠を見いだせなかった。このため九品蓮池が蓮花・七宝橋と関わりを持つとした、これまでの考えを改めることが避けられなくなった。

崔夢龍、1976、九品蓮池発掘、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局、P60-69

¹⁷⁾ 沈愚京、康勲、1989、韓国古代寺刹における影池の象徴的意味と修景的価値・韓国庭苑学会誌7(1)、P88-93

¹⁵⁾ 秦弘燮、1976、仏国寺境内遺物概要、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局、P46



を伝え宗教的感動を与えようとする初期仏教の1つの方便として始まったと思われる。仏影を湛える皿としての影池の導入時期は三国時代以降とされており¹⁷⁾、この影池は仏、塔、山頂などを寺刹の境域内に取り込み水面に映す機能を果たすもので、いわゆる引影法を駆使する修景的特徴を持つ。

我が国の寺刹に存在するこのような影池としては、海印寺、清平寺、浮石寺、仏影寺などに見られる影池が代表的なものとして知られているが¹⁸⁾、仏影崇拜が宗教的な象徴性を表現する1つの方便である点から見て、多くの寺刹に影池が存在したことは容易に予測できる。我が国では、影池が多くの類型を示していることが確認でき、興味深い。全羅南道昇州の松広寺のように自然の溪流を堰き止めて造成した溪潭が影池の機能を果たす例があり、石槽によって影池の効果をを得る例もあり、人工蓮池を造成し本格的に影池として機能させる例も見られる。

それでは仏国寺の蓮池は、どのようなものを投影したのだろう。前述の梅月堂や草衣の詩句や構造的な側面から分析すると、仏国寺の蓮池には楼閣、釈迦塔の紫霞門、青雲橋、白雲橋などの影が映ることになり、これを基に考えると仏国寺の蓮池は仏影崇拜の象徴性を複合的に表現する特異な類型であると推察できる。

一方、仏国寺古今創記には「九品蓮池」という名称が明確に記されているのみならず、「嘉慶三年(正祖3年)戊午年に蓮池の蓮の葉を返す」との記録もあり¹⁹⁾、仏国寺の蓮池が仏教の象徴花である蓮花を飾る皿としての機能を果たしたことがわかる。ここでの九品蓮池は、浄土信仰での九品蓮台に由来する名称と見られ、浄土に往生する者

が座った9種類の蓮花台が即ち九品蓮台である。このうち中上品は蓮花台であり、中中品は七宝蓮花である。したがって極楽殿一郭へ登る蓮花橋の名称は蓮花台に、また七宝橋の名称は七宝蓮台に由来するものと考えられる。このように見たとき、仏国寺の蓮池は極楽浄土へと進む過程で現れる象徴的表現の結果である。このような理由から、これまで仏国寺蓮池は蓮花・七宝橋と関連付けて説明されてきたものと思われる。

別の側面から見ると、仏国寺の蓮池は聖と俗を区分する境界としての役割を担っていたことがわかる。韓国の伝統寺刹の景観的特徴に挙げられるものの1つが、聖と俗の領域を小川などの自然流水で区分することと言える。勿論このような現象を、山地に造成された寺刹の特徴と見ることもできようが、仏国寺の場合、山地寺刹としての形式は異なるが内容的側面では同一と思われる。

V. 結論

仏国寺は、石窟庵と並び新羅文化の花と表現されるほど重要な意味を持つ寺刹である。また仏国寺と石窟庵は、同じ年代に同一人物によって、しかも同一の信仰的意味を持って創建された。

しかしこれまで一般人の関心や専攻者による研究は石窟庵に傾く傾向が見受けられ、仏国寺に関する数少ない研究も、実のところ仏教学界や美術史学界が主に主導してきた。しかし近年、仏国寺の原形復元についての問題点が指摘されており、仏国寺研究の不足を反省する声もあがっている。現時点において造景学界は、仏国寺の原形回復へ向けた取り組みを学界として進めるべきであり、その結果が他分野の研究結果と合わさって仏国寺の原景観を回復させる一助となるよう努めなければならない。とくに仏国寺の蓮池は記録上明確に示されているもので、水景観構成という側面から極めて重要であることは言うまでもなく、仏国寺の全体配置の持つ意味の完成という面から見て必ず復元されるべき対象と思われる。

本研究は、蓮池が復元されなければならない必要性の存在を知らしめ、復元過程で論議の対象とされるべき蓮池の位置、機能そして意味を明らかにすべく、主に文献考察と発掘調査報告書の分析ならびに現場踏査によって

¹⁸⁾ 上掲書、P88

¹⁹⁾ 崔夢龍、1976、前掲報告書、P61

進められた。研究結果の要約は、以下の通りとなる。

第一に仏国寺蓮池の位置は、聖と俗の区分手段である石壇の下部分の青雲橋、白雲橋の南側部分に該当することがわかった。

第二に仏国寺蓮池は人工池であり、楕円形をなし、池の周囲は巨大な岩石を囲むように積みあげていたが、これは統一新羅時代の典型的な石積み方法であることが確認できた。

第三として、仏国寺蓮池は、俗人に仏教の持つ神異的な内容を伝え宗教的な感動を与えるための方便としての影池としての機能と、仏教の理想郷を表現し修景効果を高めるための蓮池としての機能、さらには聖と俗を区分する境界としての意味を持つものとの解釈を得た。

Summary

The purpose of this study is to certify the location, function, form and inheritent mearning of the *yeon-gi* (lotus pond) that was existed in *Pulguksa* temple bygone days. This study was performed mainly by both the review of written materials ans field surveys.

The results of this study are as follows;

Firstly, the *yeon-gi* was located at the lower part of the *seok-dam* (which distinguishes sacred place from common place) and southern part of *Cheongungyo* and *Bekungyo*.

Secondary, the *yeon-gi* was an artificial pond with oval shape, constructed by the large stone and the *yeon-gi* proved to be a traditional form and construction method of *Silla* Dynasty.

Lastly, the *yeon-gi* was built to influence Buddhist and its divinity, to express utopia described in Buddhism, to enhance waterscape of the temple, and also can be interpreted as border which distinguishes sacred places from common place.

参考及び引用文献

1. 姜裕文、1937、仏国寺古今創記跋、仏国寺古今創記、慶北仏教協会
2. 金相鉉、1986、石仏寺および仏国寺の研究、仏教研究2、韓国仏教研究院
3. 金相鉉他2名、1992、仏国寺、テウオン社
4. 金相鉉、1994、仏国寺に関する文献資料の検討、芝邨金甲周教授華甲記念史学論叢
5. 沈愚京、康勲、1989、韓国古代寺刹における影池の象徴的意味と修景的価値・韓国庭苑学会誌第7巻1号
6. 秦弘燮、1976、仏国寺境内遺物概要、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局
7. 崔夢龍、1976、九品蓮池発掘、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局
8. 通度寺聖宝博物館、1987、韓国の明利通度寺、三省出版社
9. 韓国仏教研究院、1988、韓国の寺刹1 仏国寺、一志社
10. 洪光杓、1991、新羅寺刹の空間形式変化についての研究、成均館大学校大学院博士学位論文
11. 黄寿永、1976、仏国寺の創建とその沿革、仏国寺復元工事報告書、文化財管理局
12. 鑑洲集
13. 東京遊録
14. 東国李相国集
15. 東文選
16. 梅月堂詩集
17. 民斎文集
18. 仏国寺古今創記
19. 仏国寺事跡
20. 三国遺事
21. 円宗文類
22. 浄土三部経
23. 活山集